

2022年5月8日 礼拝説教要旨

詩編講解説教108「天に解き放たれる」

詩編108：7～14、マルコ2：1～5

詩編第108編は前半の2～6節が第57編8～12節の引用、また後半7～14節が第60編7～14節の引用になっています。つまり二つの詩編からそれぞれ切り取って結び合わせ、新しい詩編とするという非常にめずらしい形の詩編です。こういうのが詩編の自由さであり、ユニークさでもあると思います。ある注解書では、詩編のリサイクルだと言います。古い歌をつなぎ合わせて新しい詩編として再利用しているのです。

この第108編が第57編、第60編を用いているということは、この二つの詩編はすでに存在していたことを示します。詩編は年代の幅が広いのですが、聖書学的にもこの二つの詩編は古く、一番古い説ですと、王国時代つまりダビデやソロモンの時代にまで遡ることができると言われていました。最近の研究ではもっと後の時代と言われます。一方、第108編は紀元前2世紀中頃には成立していたのではないかと言われます。そうなりますと800年くらいの開きがある。日本で800年前と言えば鎌倉時代ですが、日本史の教科書では新古今和歌集が作られたのはこの時代と言われます。それくらい昔の歌を現代にリメイクするようなものです。

それは何より御言葉に時代を超えた普遍性があることを示しています。どんなに時代が変わっても、変わらない真理がある。だから800年の時を超えて歌われるのです。現代のわたしたちからすれば800年どころではありません。王国時代から数えれば3000年の時を超えています。それが永遠なる神さまの言葉なのですが、わたしたちが毎週教会に来て読む聖書は、そういう普遍性を持っています。この永遠なる神さまの言葉に触れる時に、人間はこれまでの狭い価値観、自分を閉じ込めていた殻を打ち破り、新しくされていきます。そこに御言葉の役割があります。

ではその普遍性、変わらない真理とは何でしょうか。この詩編の元になった第60編はもともと「敗北の歌」であり、ダビデが追い詰められ完全に行き詰まってしまった状況を詠んだ歌があります。「どうか我らを立ち帰らせてください」（60：2）と歌い始めます。神さまに立ち帰ることなしに勝ち目は無いことを認めています。第57編もダビデがサウルを逃れ洞窟に隠れていた時に詠んだ歌であるという表題がついています。ダビデにしてみれば、周囲を敵に囲まれ絶体絶命の状態です。そういう中で神さまに助けを呼びます。「いと高き神を呼びます。わたしのために何事も成し遂げてくださる神を。天から遣わしてください。神よ、遣わしてください、慈しみとまことを」（57：3、4）と歌います。二つの詩編はいずれも人間の限界性を詠っています。それゆえ全体的に敗北感、悲壮感が漂っています。

ところが、第108編はこの二つの詩編を合成させたものですが、不思議と悲壮感はあまり感じさせません。2節「神よ、わたしの心は確かです」と強い確信から始まります。七十人訳聖書では「わが心は準備ができています」としています。心が決まっている。覚悟ができています。その強い確信が最後まで貫かれています。「どうか我らを助け、敵からお救いください。人間の与える救いはむなしいものです。神と共に我らは力を振ります。神が敵を踏みにつけてくださいます」（13～14節）この強い確信こそ、悲壮感を感じさせない要素なのでしょう。第108編を編集した詩人はそういう効果を狙って二つの詩編を結びあわせたと考えられます。

この歌が詠われた時代もダビデと同じような状況でした。第108編は歴史的にはマカベア戦争の時代と言われますが、これは隣国シリアによって攻め込まれ、エルサレム神殿にゼウス祭儀が導入されるというイスラエルにとって屈辱的な事件がありました。それこそ周囲を敵が囲み、勝ち目がない状況です。でも14節「神と共に我らは力を振ります」とあります。「神と共に」というのは、「神によって」ということです。神さまが共にいてくださるから自分たちは立ち上がる。その限界を超えて戦う。その強い確信があつて、イスラエルは反旗を翻しマカベア戦争が起こります。そしてエルサレムを奪還いたしました。この時ユダヤ人の心を鼓舞したのがこの歌であつたと考えられます。

実はこの800年の歴史の中でイスラエルは何度も苦い経験をしました。神さまが共におられることを忘れて、人間の力だけで解決しようとしたのです。その度に預言者が登場して戒めます。例えば、ホセアは「エフライムは鳩のようだ。愚かで、悟りが無い。エジプトに助けを求め、あるいはアッシリアに頼って行く」(ホセア7:11)と言います。これは神さまではなく、人間の力、大国におもねり、迎合するイスラエルへの痛烈な批判です。イザヤもそうです。随所にエジプトに頼る外交政策を批判するところがあります。でも王たちは預言者の言葉を聞きません。それゆえに北イスラエルはアッシリアに滅ぼされ、南ユダもバビロニアによって滅ぼされます。ですからバビロニア捕囚というのは、イスラエルが神さまではなく人間に頼った当然の結果であると言えます。人間の可能性がすべて失われ、完全に挫折した。「人間の与える救いはむなしなもの」(13節)この言葉を痛いほど突きつけられた。だから同じ過ちを繰り返してはいけない。人間ではなく神さまに立ち帰るところに救いがある。それが人間にとって繰り返し覚えるべき不変の真理なのです。

伝統的に教会はこの詩編をキリストの昇天記念日に読んできました。ちなみに昇天日はイースターから40日後、今年は5月26日となります。なぜ昇天記念日にこの詩編を読んだのか。それは人間の挫折、行き詰まりを超えて、その限界の先へ、わたしたちの思いを天、神さまのご支配に向けさせる、神さまに立ち帰ることを促す御言葉だからです。今日は新約聖書の中風の人の癒しを読みました。屋根を剥がして中風の人を主イエスのもとにつり下ろした話です。屋根を剥がすというのは非常に象徴的で、人間の限界、行き詰まりが天に向かって開かれていくことを示します。そのために主イエスは十字架で死なれ、三日目によみがえられ、そして天に昇られました。わたしたちの存在を天に向かって解き放ってくださいました。この信仰が困難の中で行き詰まるわたしたちを鼓舞し、再び立ち上がることを可能にいたします。